

3年D組 音楽科 題材設計・学習指導案

指導者 三棟 優子

1 日時(場所) 12月8日(水) 10:35~11:25(第1音楽室)

2 題材設計(題材名:オペラの魅力)

(1) 本題材で育成したい自立と共生の力

- 問題の解決にむけ、自ら考え、見通しをもって行動する力
- 自分の気持ちや考えを表現し、伝える力
- 多様な価値観を認める力

(2) 題材の目標

- 曲想と音楽構造との関わりについて理解することができる。 「知識及び技能」
- 音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、音楽表現の共通性や固有性について考え、よさや美しさを味わって聴くことができる。 「思考力、判断力、表現力等」
- オペラの多様な表現に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組み、音楽に親しんでいく態度を養う。 「学びに向かう力、人間性等」

(3) 重点目標

<本質的な問い>

オペラの魅力とは何だろう。

<永続的な理解>

オペラは400年以上にわたって世界中で愛され続けている。オペラは、音楽・文学・演劇・美術など多くの要素を併せ持つ総合芸術であり、世界の様々な国の生活文化の中で重要な役割を担っている。絢爛豪華な劇場という空間で、オペラ歌手の歌唱力、様々な歌唱形態や管弦楽の多彩な響き、演出が醸し出す総合芸術の表現の素晴らしさを味わうことができ、それぞれの時代にあった人々が共感できる舞台を創り上げている。そして、人間社会に起こる様々な出来事や人間模様を、多様な音楽にのせて表現する。人間ならば誰でももちうる感情や情動、または日常的に目や耳にする自然現象や社会事象などをテーマとしている作品がある。さらに、同じ題材でも時代による芸術様式が異なることで表現方法も多様である。

(4) 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
曲想と音楽の構造との関わりについて理解している。	①音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。 ②音楽表現の共通性や固有性について考え、アリアのよさや美しさを味わって聴いている。	オペラの多様な表現に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

(5) 評価の方法

パフォーマンス課題	その他の評価方法
あなたは、音楽プロデューサーです。オペラの感情を表したアリアを特集したDVDの制作を依頼されました。テーマは「怒り」です。あなたが「怒り」を感じたアリアについて、どのような表現をされているのかを考え、そのアリアの魅力を紹介するポップを作しましょう。	○ワークシートへの記述 ○観察 ○発表 ○演奏聴取

＜パフォーマンス課題についての予備的ルーブリック＞

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	Bの評価に加え、音楽の特徴と他の芸術との関わりについても触れながらポップを作成できている。	Bの評価に加え、音楽表現の共通性や固有性に気付き、オペラのよさを見いだすなど、自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。	他者との関わりの中から自分の価値意識を再確認し、音楽の構造などを一層客観的に把握した上で、アリアの魅力を伝えようとしている。
B	アリア固有の曲想が、どのような音楽の構造によって生み出されているのかを捉え、ポップを作成できている。	「怒り」を感じた根拠について、音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。	本題材で学んだことを振り返り、他者に紹介したいところが自分にとってどのような価値があるのか、伝えようとしている。
C	ポップを作成する際、アリア固有の曲想のみを書き、音楽の構造との関わりについて捉えられていない。	「怒り」を感じた根拠についておおむね妥当な内容を書いていない。	本題材で学んだことを振り返り、他者に紹介したいところが自分にとってどのような価値があるのか、伝えることができていない。

(6) 指導計画（全4時間）

時間	○ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
1	○オペラが総合芸術であることや、オペラ「アイダ」のあらすじを知る活動を通して、音楽の特徴や他の芸術との関わりについて理解する。	知		・物語の内容や総合芸術について理解している。（観察・振り返りシート） ・オペラの鑑賞の視点について、自分なりに考えることができています。（振り返りシート）
2	○オペラ「アイダ」第2幕第2場を鑑賞する活動を通して、魅力を自分なりに解釈する。	思	○	・第2幕第2場の魅力について、知覚・感受したこととの関わりについて考え、よさや美しさを味わって聴いている。（ワークシート）
3 本時	○「怒り」という感情を表現したアリアを比較鑑賞する活動を通して、オペラの多彩な表現方法を理解する。	知		・アリアを形づくっている要素の役割や特徴を理解し、解釈して考えをまとめることができる。（ワークシート） (支援)比較鑑賞する視点について焦点を絞って考えさせたり、グループで鑑賞した内容を相談させたりして、自分の考えを明確にさせる。
4	○パフォーマンス課題に取り組む活動を通して、曲や演奏に対する評価とその根拠について考える。	知 思 態	○ ○ ○	・パフォーマンス評価 ・アリアの多様な表現に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

「重点」は、重点的に生徒の学習状況を見取る観点を示しており、観点の略称は以下の通り。

知識・技能…「知」 思考・判断…「思」 主体的に学習に取り組む態度…「態」

重点としていない観点についても、生徒の学習状況の評価し、教師の指導改善や生徒の学習改善に生かす。

3 本題材と研究主題との関わり

(1) 生徒について

本学級の生徒(32名)は、アンケートによると「音楽の授業は楽しい」と回答した生徒が31名、「鑑賞の授業が好き」と回答した生徒が25名いた。「鑑賞の授業が好き」の理由として、「新しい音楽に出合えるから」「どの音楽も、様々な要素が組み合わさってできているので、それを鑑賞によって自分なりに答えを出したり発見したりすることが楽しいから」「音楽の楽しさやそれぞれの特徴ある表現などを学べるし、それを周囲の人と意見交換でき、自分の意見を深めたり、自分とは違った気づきを知ることができるから」などが挙げられていた。これらの記述より、音楽の授業で鑑賞の授業を肯定的に捉えていることが分かる。したがって、これまでの研究実践に成果があり、力が身に付いていることを生徒も自覚できているということが分かった。

しかし、「音楽で学んだことが将来役に立つと思うか」という質問に対し、「思わない」と答えた生徒が5名おり、その理由は「将来音楽と触れ合う機会が少ないと感じるから」であった。音楽科の持続可能な社会の実現に貢献する実践者とは、一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる者である。本題材を通じて、音楽を形づくっている要素や構造と曲想の関わりを理解して聴くことにより、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を育成したいと考えている。

(2) 題材について

本題材で取り扱うオペラ「アイーダ」第2幕第2場は、独唱、重唱、合唱といった複数の歌唱形態、オペラ歌手の歌唱力、オペラ歌手の演技を支える管弦楽の豊かさ、大掛かりな舞台芸術など、幅広い観点で鑑賞できる教材である。また、アリアはオペラなどで独唱者にとって聴かせどころとなる曲のことを言い、感情が高まった時の気持ちが歌になっている。作曲家にとっての腕の見せ所、歌手にとっても聴かせどころである。オペラでは、愛や怒りといった普遍的なテーマでも、その表現の仕方は作られた時代や作曲家によって全く異なることがある。本題材を通して、オペラの特徴や構成を理解し、登場人物の心情などを管弦楽の響きと照らし合わせて鑑賞したり、同じテーマや同じ感情を異なる時代の作曲家がどのように表現しているのかを考察させたりすることにより、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができると考え、題材を設定した。

(3) 「深い学び」の実現に向けた指導の工夫について

既有的知識や経験から音楽的な見方・考え方を働かせ、学びの深まりが実感できる指導法の工夫を次の通り行う。

ア 深い学びを実現するためのカリキュラムマネジメントの工夫

生徒たちは、小学校の鑑賞の学習では、音楽を聴くだけでなく、身体を使って表現しながら楽曲の要素やよさを体感的に学んでいる。教材として、オペラ「魔笛」より「パパゲーノとパパゲーナの二重唱」が取り上げられている。本題材では、オペラ「魔笛」の別のアリア「夜の女王のアリア」を取り上げ、同じオペラの曲でも新たな鑑賞の視点を見つけることにより多様な音楽を楽しむことにつなげられると考える。また、異なる時代のアリアを取り上げることによって、高校で学習する音楽史にもつなげるなど、小学校から中学校、そして高校への連続性・系統性を考えた題材構成を工夫したい。

イ 音楽科の特質に応じた言語活動による対話的な学びの充実

授業では、自身の思いや意図を実際に歌って伝え合ったり、表現の工夫をオノマトペなどで音楽的に表したりするなどし、音楽科の特質に応じた言語活動を工夫し、音や音楽を聴き取り感じ取る力の育成につなげたい。そして、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、音楽活動と言語活動の往還を図りながら、主体的・対話的に学ぶ学習を展開していきたい。また、対話的な学びを取り入れることで、生徒一人一人が自らの考えを他者と交流したり、互いの気付きを共有し、感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深め、オペラのよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。

ウ 自らの学びを自覚し、次につなげる振り返り活動の充実

ロイロノート上で作成した振り返りシートに学習履歴を書き残すことで生徒が自身の学びをメタ認知することができる。さらに、記述内容に対しては、毎時間的確にコメントすることで生徒の学びが深まると考える。また、教師は記述をもとに生徒の変容を見取り、子どもの実態に合った授業に改善することができる。

4 本時の指導（3/4時間）

(1) 主題 「怒り」の表現に迫る！

(2) ねらい

- オペラの多様な表現に関心を持ち、音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。

(3) 展開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ ・予想される生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
1 前時の復習をする。 （一斉）	3	○オペラ「アイーダ」の第2幕第2場の最後の部分は、登場人物が色々な感情を歌い上げていたね。	○前時の復習を想起しやすいうように、板書やプレゼンでまとめておく。
2 学習課題を提示する。 （一斉）	7	○人間誰もが持っている感情をオペラではどのように表現しているのか、考えよう。 「怒り」の表現に迫る！	
3 「怒り」の表現方法について考える。 （全体）	5	○どんな時に「怒り」の感情が芽生える？ ・苛立ち ・不満 ・嫉妬 ・自分の思い通りにならなかった時	○主体的に鑑賞させるために、子どもに見通しを持たせ、自分たちで考えた鑑賞ポイントを設定させる。
4 2曲のアリアについて比較鑑賞をする。 ① アリアの物語の内容について理解する。 （全体）	30 (5)	○2曲のオペラアリアを比較鑑賞して、「怒り」の多様な表現に迫ろう。 【夜の女王のアリア】 自分の娘に「敵を殺しなさい。さもなくばお前はもう娘ではない！」 【No, pagliaccio non son】 現実と重なる芝居に動揺し、芝居と現実世界の区別がつかなくなる。妻の浮気に怒り狂い、叫び出す。	○物語上の相関図が一目で分かりやすいように、プレゼンにまとめる。
② アリアを比較鑑賞し、多様な表現について考える。 （個人→小集団→全体）	(25)	○どちらのアリアがより「怒り」を表現していると思いますか？ 【夜の女王のアリア】 ・言葉にならない思いを、歌詞ではなく一つの言葉を長く伸ばしながら表現しているから、より「怒り」が伝わった。 ・ものすごく高い声だったので、叫んでいるように聞こえたから。 ・口を大きく開けて歌唱表現しており、鬼気迫る表情が恐かったから。 ・オーケストラは伴奏、短く音を切っている。器楽曲みたい。歌が主役。 【No, pagliaccio non son】 ・大きな歌声と演技により「怒り」がストレートに伝わってくる。単純で分かりやすいから。 ・オーケストラも歌とともに表現していて、より伝わってくるから。	○2曲の楽譜を用意し、楽譜から根拠を探そうとすることができるようにする。 ◎アリアを形づくっている要素の役割や特徴を理解し、解釈して考えをまとめることができる。（ワークシート）
5 本時の学習を振り返る。 （個人）	5	○今日の活動を通しての振り返りと次時への目標をロイロノートで提出しよう。	○次時の課題につながるように、ロイロノートを用いて、本時の学習活動を振り返らせる。
授業研究の視点		○小学校から中学校、そして高校への連続性・系統性を考えた題材構成は、深い学びの実現において有効であったか。	